

世界の英語・日本人の英語 (前)⁽¹⁾

後 藤 いく子 (社会言語学)

I はじめに

本格的な国際化時代の到来と共に、英語の重要性が改めて認識されるようになった。「二十一世紀日本の構想」懇談会において「英語第二公用語」論が提言されたり、2002年からは小学校においても英語の授業が導入されるようになる等、日本では現在国をあげて英語運用力の必要性が取りざたされている。「IT革命」により、外国との距離がかつてないほど狭まってきていることもこの趨勢に拍車をかけているといえよう。確かに、英語は現在情報のグローバル化に伴って国際社会で最も広範囲に使われている言語である。そのため英語は〈国際共通語〉であるとか、〈地球語〉である等と呼ばれるようになってきた。しかし、私達はこの意味を正しく理解しているであろうか。

多くの日本人にとって、英語とは〈アメリカ英語〉または〈イギリス英語〉のことであり、英語が話せるということは英米人のように話すことであると考えられているのではあるまいか。また、外国といえばアメリカのことであり、外(国)人とは白人を指し、彼等と〈アメリカ英語〉を使ってコミュニケーションをすることが国際的であるといった図式が一般に浸透しているように見受けられる。それは例えば、文部科学省により毎年中学校や高校に招聘される外国人英語教師がほとんどアメリカ人であること(国籍は英米でも、黒人やアジア系の人は稀である)、町の英会話学校の広告ポスターには必ずと言っていいほど白人の顔写真が載っていること、語学留学の行き先の圧倒的多数がアメリカやイギリスであること等の事実からも明らかである。このような日本人の観点からすると、英米人の英語のみが本物の英語であり、英米人のみが正当な英語話者であるという結論に至るのは当然の成り行きといえよう。しかし、「英語は国際語」と呼ばれている現在でも英米人の話す英語のみが本物の英語だといえるのだろうか。また、私達日本人は英米人のように英語を話せなければならないのだろうか。

本稿では現在世界各地で使われているさまざまな英語に対する大学英語教育学会の最近の考え方も折り混ぜながら、英語は誰のものなのか、そして世界の英語との関連から、私達日本人の英語はどうあるべきか、私達は何を学習すべきなのかについて考察する。

II 英語は誰のものか

1 英語の歴史的背景

歴史を振り返ってみると、一民族、一国家の言語だったものがその枠を越えて多くの民族やさまざまな国の共通の言語になった例はいくつか見られる。古代ギリシャ語がヘレニズム時代に地中海や黒海沿岸地域の共通語となっていたことや、ラテン語がローマ帝国時代に西ヨーロッパ世界の共通語として勢力をふるい、現在のフランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・

ルーマニア語等の基となったこと等はよく知られている。また、アラビア半島のアラビア語が7世紀以降のイスラム教・イスラム文明の興隆と共に北アフリカ・スペイン・中央アジア・東南アジアに至るイスラム文化圏の諸地域で共通語として使われていたこと、そして中国の言語が唐代以降、日本・朝鮮半島・インドシナ半島において漢字文化圏を形成し、当時の知識人の共通語であったこと等も記憶に新しい。このように過去においても共通語はいくつか存在してはいたが、通用する地域に関していえば、それぞれの時代の支配勢力の及ぶ範囲に限られていた。

ところが、英語は規模の点において世界のほぼすべての地域で一応通用するという人類史上初めて、文字通り<世界語><国際共通語>の地位を獲得したのである。しかも、英語が事実上<世界語>といわれるようになったのは第二次世界大戦後のことであり、それまでは英語圏以外の国では—ヨーロッパ内においてすら—必ずしも優勢なく<国際共通語>ではなかったのである。

ヨーロッパの一地域に住む一民族の言語であった英語が、どのようにして世界に広がり今日の地歩を確立するに至ったのかについて、その歴史的経緯を、(A) 英語の地理的拡大、(B) アメリカの影響力、(C) 旧植民地の独立、の3つの段階に分けて概観する。

A 英語の地理的拡大

英語はケルト人が住んでいたブリテン島に449年に侵入してきたゲルマン民族の一部族であるアングロ・サクソン人の言語が起源である。1066年のフランスのノルマン人による征服後にはフランス語から語彙を大量に吸収し、文法的には名詞の格変化や(文法)性が消滅する等、他のゲルマン語系の言語には見られない画期的ともいえる簡素化を遂げた。ブリテン島という一地域のみ言語であった英語が海外へと進出したのは17世紀から19世紀にかけての大航海時代、そしてその後続く植民地支配の時代である。

初期アメリカ移民の大部分がイギリス人であったため、新大陸では英語がしっかり根を下ろし、その後相次いでやってきたドイツ人・ロシア人・イタリア人等も共通語として既に定着していた英語の習得を余儀なくされた。1790年の第一回国勢調査時に約4千万人であった人口は、1900年には三倍の1億2千万人へと大幅に膨れ上がっていく中で(織谷 1983:96)移民家族は一世代か二世代のうちに居住する地域共同体への同化の一環として英語を使うようになり、英語話者人口は増加していった。アメリカの他にも、カナダ・オーストラリア・ニュージーランド方面へイギリスを初めヨーロッパ各地から移民の波が相次ぎ、英語は多方面に広がっていった。

やがて大英帝国と呼ばれるほどに国力を増したイギリスは海外進出を遂げ、アジアやアフリカの国々を次々と支配するようになり、それらの植民地においても英語は政治・経済の中核で、イギリス人だけでなく現地の指導者によっても使われるようになった。

こうして17世紀から19世紀にかけて、英語はブリテン島を脱し地理的拡大を遂げ、広範な地域で確実に根を下ろしていったのである。

B アメリカの影響力

20世紀になり第二次世界大戦が終わると、アメリカが世界の主導権を握り、文明の中心はイギリスを含むヨーロッパからアメリカに移っていった。政治・経済・外交・科学技術・工業・娯楽といった生活のさまざまな分野においてアメリカは全盛時代を迎え、アメリカの言語である英語も大きな影響力を持つようになった。

この流れは日本にも及び、それまで禁止されていた英語教育が戦後になって広く開放され、日本が経済成長を遂げた1960年代以降になると、英語は知識人のみならず多くの日本人にとって

「国際人」の重要な資格と考えられるまでに至った。町に英会話学校が乱立していることからその盛況ぶりが伺い知れる。マスコミや若者を中心にアメリカ文化が浸透し、日本語の中に英語からの外来語が氾濫するようになった。

自国の言語に強い誇りを持つフランスにおいてすら、日本の場合と同様に、言語面ではフラングレ (franglais = français 《フランス語》 + anglais 《英語》) と呼ばれる英語が氾濫し、フランス語の危機が叫ばれるほど英語化が進んだ。

こうしてアメリカの影響力のもと、また交通・通信・情報に伴う国際化が進むにつれて、英語はその伝播・普及の度合いを増幅していき、国内の日常生活で英語を必要としない国においても、学校教育の場で英語が広く学ばれるようになった。

C 旧植民地の独立

最後に英語の世界的普及に拍車をかけることになったできごとは旧植民地の独立である。イギリスが長期にわたって支配していたアジアやアフリカの植民地、そしてスペインに代わってアメリカが統治していたフィリピンが、第二次世界大戦後次々と独立し、その結果英語は一層深くそれらの地域に浸透していくことになった。多民族・多言語からなる各植民地において、英語は(旧宗主国の言語ではあったが)どの民族にも偏らない中立的共通語として、独立後には植民地時代よりもむしろ広範に使用されるようになったと言えよう。

これらの新生植民地において英語は対外的・国際的な理由からというより、中立言語として、また公用語の一つとして自国内の社会・制度・生活習慣の上で必要に迫られて使用されているうちに次第に土着の言語や文化の影響を受け、特徴のある英語へと育っていった。例えば、＜インド英語＞＜シンガポール英語＞＜フィリピン英語＞等と呼ばれる英語はこのような「現地種化」の過程を経て誕生したものである。

2 英語の分布

前述したように英語はブリテン島からの海外進出、第二次世界大戦後のアメリカの影響力による伝播・普及、その後の旧植民地独立等の経緯を経て、今日＜世界語＞としての地位を獲得するに至った。

このような世界大で広がった英語の状況を、インド出身であるアメリカの言語学者ブラージ・カチュルーは、英語をどのように身につけ今日使用しているかを基準に三つの「地域」に分類し、それを同心円の形で表した(図1参照)。

「中心円」の地域とは、英語を、＜国語＞とする国、または英語を＜母語＞(ENL = English as a Native Language 《母語としての英語》)として身につけ使用している人が大多数である国を指す。イギリス・アメリカ合衆国・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド等、英語が地理的拡大を遂げた時期に誕生した地域がこれに相当する(II. 1. A. 参照)。この「中心円」に属する英語の話者人口は約3億人であると推定されている(本名 1990:1)。しかし「世界広しといえども、英語を母語とする国はたかだか11カ国に限られて」おり、「国連に加盟している主権国家を現在 190か国とするなら、国家数にあっては十六分の一にすぎ」ず、「どう見積もっても少数派でしかない」(クリスタル 1999:199)のである。

この「中心円」を囲む次のグループである「外円」の地域とは、英語は母語ではないが、多言語が存在する中で重要な＜公用語＞(Official Language)、または＜第二言語＞(ESL =

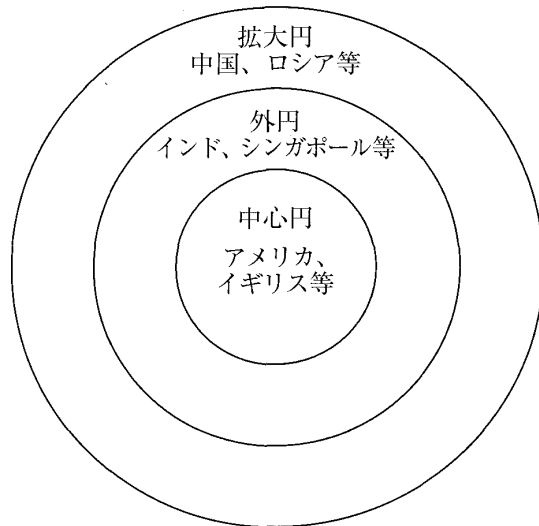


図1 英語の三つの「円」 (クリスタル 1999: 79)

English as a Second Language 《第二言語としての英語》) となっている国を指す。早くに英語が普及した地域であり、主要な機関で英語が不可欠となっているインド・シンガポール・フィリピン・ナイジェリアのような、旧植民地独立に伴って誕生した地域がここに含まれる (II. 1. C. 参照)。この「外円」の国は70か国を上回り、その推定話者人口は10億人である (本名 1990: 1-3)。アジアだけでも「中心円」の英語話者人口に匹敵する3億5千万人がここに含まれる。

一番外側の「拡大円」の地域とは、「中心円」の国の植民地になったことがなく、社会生活に英語を必要としない国々である。それぞれの国で国語を持っているため、英語はもっぱら外国との関わりや海外とのコミュニケーションに使われるだけである。日本を初め、中国・韓国・ロシア・ドイツ・イスラエル等、英語が<外国語> (EFL = English as a Foreign Language 《外国語としての英語》) として広く学ばれ、その結果として対外的な場面で英語が使える人のいる国々がここに属する (II. 1. B. 参照)。アメリカの台頭に伴い、国際化社会・情報化時代の到来により、更に多くの国々が着実にこの「拡大円」に加わっている。アルジェリアが1996年以降、旧宗主国の言語であるフランス語に代わって、英語を主要外国語として学校教育に取り入れるようになったのはその好例である。「拡大円」の国は100余りに上り、その話者人口は、非常に堪能に英語を話す人からそれ程堪能ではない人を含めると7億人であると推定されている (本名 1990: 3)。

以上、この「中心円」「外円」「拡大円」で示された英語圏それぞれの分布から明かなように、<世界語>としての英語は、通用する地域に関しても話者人口の数においても、<英語を母語としない人> (ノンネイティブ・スピーカー) の方が<英語を母語とする人> (ネイティブ・スピーカー) より圧倒的に多数であるということがわかる。このことは、私達日本人が英語を使って話をしたり、何らかのかかわりを持つ相手はイギリスやアメリカ、またはオーストラリアのような<英語を国語とする国>の人であるより、フィリピンや中国のような<英語を国語としない国>の人である場合の方が圧倒的に多いということを意味している。

現在、地球上で全人口の約四分の一近くが英語を<第一言語/母語 (ENL)>として、または<公用語/第二言語 (ESL)>として、あるいは<国際語/外国語 (EFL)>として使っているとされている (クリスタル 1999: 12)。これは言い換えれば、実に四人に一人が程度の差こそあれ英語をいろいろな場面に応じて使っている勘定になり、その実数は1990年代後半の時点で

12億人から15億人にも上るといふ。21世紀に入り、日常生活に不可欠なものとなったコンピュータ情報もその入力・出力の80%以上は英語である。また「拡大円」の地域に日本・中国・インドネシア・ロシア等、人口の多い国が含まれていることから、21世紀にはますます英語話者人口が増大する傾向にある。世界最大の言語話者を持つといわれる中国語ですら、〈話しことば〉においては相互理解が不可能である七つの方言⁽²⁾に分かれており、しかも中国語の話し手はほとんどが中国人に限られている。統一された〈書きことば〉も13億人が知っているだけなのである。

3 さまざまな英語

英語が〈国際語〉〈世界語〉等と呼ばれるようになったとはいっても、それは世界中の人々がどこでもまったく同じ英語を話しているということではない。全世界に広がっていった結果、英語は根を下ろしたさまざま地域で特有の変化を遂げ、新しい種類の英語が登場することになったのである。〈アメリカ英語〉が〈イギリス英語〉から枝分かれして、独特の語彙や発音を持った英語の一変種/異種 (Variety) として認められていることはよく知られている。英語を母語とする他の「中心円」の人々がそれぞれ〈オーストラリア英語〉〈カナダ英語〉等と呼ばれる特有の英語を話しているように、英語を母語としない「外円」の人々も当然ながらいろいろと特徴のある英語を使っている。

学校教育の場で、また映画・テレビを通して耳にする機会のある「中心円」の英語と比べると、「外円」の英語は私達日本人にとってあまり馴染みのないものといえよう。ここでは「外円」の英語の中でも今日〈世界の英語〉の異種として定着し、その存在が認知されている〈インド英語〉と〈シンガポール英語〉を取り上げ、それぞれの国における英語の社会的背景・英語教育の状況・言語的特徴について記していく。

「中心円」の英語についてもいえることであるが、〈書きことば〉としての英語に関する限り、文法やスペリングがほとんど変化していないので〈インド英語〉も〈シンガポール英語〉も旧宗主国の〈イギリス英語〉に近く、地域固有の文化に関する文脈でない限り異種間の差異はあまり目立たない。しかし、それぞれの英語の特徴が最も際立っているのは、発音・イントネーションに代表される〈話しことば〉においてである。ここでは〈話しことば〉における音声的特徴、そしてまた語彙・文法・表現に見られる独自の用法について述べる。

A インド英語

インドは多民族・多言語国家であり、各民族の使用する言語により25の州に分かれている。タミール・ナドゥを初めとする南インド4州はドラヴィダ語系言語を用い、北インドはヒンディー語を含むアーリア系言語の州である。

イギリス支配が続いていた時代にもインドには共通語がなかったため、独立後の1950年に発布された憲法では多数派の言語であったヒンディー語を統一国家の国語に定め、英語を1965年迄に排斥する方針がうたわれていた。しかし、英語廃止の年が近づくにつれ英語はインド全域で多数の支持を受けるようになった。特に、非ヒンディー語地域である南部のドラヴィダ系の人々はヒンディー語学習の負担を背負うことになるため、間接的に英語を支持することになった。そのため英語廃止の時期を延期せざるを得なくなり、英語は「準」公用語として存続することになった。その結果「三言語方式」(Three-Language Formula) と呼ばれる言語政策が導入されたが、

これはどの州の学生もヒンディー語・英語・ヒンディー語以外のインドの言語（居住地の言語）の合計三言語を学ぶことを義務づけるものである。こうして英語は他のインド諸言語と共に公用語の一つとして現在に至るまで使われている。インドの紙幣には13のインドの諸言語と共に英語を含めて合計14の言語が記されている。

英語は科目として教えられるだけでなく、高等教育においては教育媒体言語として使われている。特に大学レベルでは英語ができなければ卒業もおぼつかないため、教育のあるインド人は必然的に英語を使用することができる。教育レベルの違いにより英語運用レベルも異なるが、インド国内でインド人同士が英語を使っているうちに、インドの社会・制度・生活習慣の中に溶け込み、「インド化」していったであろうことは想像に難くない。

こうして<インド英語>にはインド土着の生活文化を背景にした語彙や表現が散りばめられているだけでなく、音声的にもインドの言語からの影響が色濃く反映されている。インドで行われた最近の調査によれば、インド人の3人に1人が英語を理解し、5人に1人がスピーキングに自信があると回答している（本名 1999：3）。ここでは、私達が旅行者としてインドを訪れる際に耳にするヒンディー語を母語とする人の典型的な特徴をいくつか紹介したい。

1. 音声的特徴

a. 母音

<イギリス英語> <インド英語> (これ以降は記号 ⇔ を用いて、左側は<イギリス英語>、右側は<インド英語>であることを示す。又括弧内のカタカナ表記は発音である。)

[æ]/[ʌ]	⇔	[ɛ]	bank (ベーク)、lunch (レーンチ)
[i]	⇔	[ai]	divorce (ダイヴォース)、consider (コンサイダー)
[ɔ]	⇔	[u:ai]	boy (ブアーイ)、choice (チョアーイス)
[ə]	⇔	[ei]	relative (リレイティヴ)、vegetable (ヴェジテイブル) 強勢の移動と関係していると思われる。

b. 子音

[r]	⇔	[r]	service (サルヴィス)、number (ナンバル) 弾音(flap)でいつも発音され、<インド英語>に最も顕著な特徴とも言える。
[t/d]	⇔	[t̪/d̪]	反り舌音(retroflex)で発音される。
[θ]	⇔	[tʰ]	帯気音(aspirated)になる。 think (ティンク)、growth (グロウトゥ)
[ð]	⇔	[d]	this や that は dis や dat のように発音される。

c. ヒンディー語の影響で次の子音群は、その前に [i] が付加される。

[sp]	⇔	[isp]	speak (イスピーク)、speed (イスピード)
[st]	⇔	[ist]	station (イステーション)、start (イスタルト)
[sk]	⇔	[isk]	school (イスクール)、scooter (イスクーター)

d. 強勢

ヒンディー語の影響で、閉音節で終わる語の場合には最後の音節に、開音節で終わる語の場合には最後から二番目の音節に強勢が置かれる傾向がある。

ín-ter-est-ing ⇔ in-ter-est-íng
 cér-tain-ly ⇔ cer-táin-ly
 u-ni-vér-si-ty ⇔ u-ni-ver-sí-ty

2. 語彙

インドの衣食住や文化に関連した語や、＜イギリス英語＞とは異なった用法のものが散見される。

dowry: 結婚時、妻側から夫側へ持参する金品。

hill station: 夏場に避暑のため訪れる高原にある町。

lakh: 《10万》のこと。2,00,000は 'two lakhs' と言い、位取りのコンマをうつ。

out of station: 《出張中》のこと。[例] He is out of station. (彼は出張中です)

pundit: バラモン、または学者、学者タイプの人、賢者。

subji: 野菜、または野菜でできた《おかず》の意。

tiffin: 昼食 (lunch) のこと。

walla: 《～する人》の意。[例] Taxi walla (タクシーの運転手)

3. 文法

- a. 冠詞 : ヒンディー語には冠詞がないため、英語においても使用されないか、または不要な箇所で見られることがある。

He is the best player. ⇔ He is best player.

I have urgent business. ⇔ I have an urgent business.

- b. 複数形 : 集合名詞にも -s をつけて複数形にする。

複数性を強調するときには each and every をつける。

I have lost my furniture. ⇔ I have lost my furnitures.

Many people know this. ⇔ Each and every people know this.

- c. 付加疑問 : 主節の主語と動詞に関係なく isn't it?、correct?、no?、が使われる。しばしばヒンディー語の付加疑問に相当する *hai na?* も出現する。

You are from Japan, aren't you? ⇔ You are from Japan, isn't it?

This is made in Japan, isn't it? ⇔ This is made in Japan, hai na?

- d. 倒置 : 疑問文や複文において主語と動詞の転換が起きない。

When would you like to come? ⇔ When you would like to come?

I don't know where he is. ⇔ I don't know where is he.

- e. 動詞 : 通常進行形を取らない状態動詞が進行形で使われる。

He knew this. ⇔ He was knowing this.

Do you want anything? ⇔ Are you wanting anything?

4. 表現法

a. ヒンディー語の敬意表現を英語に直訳したもの

May I know your good name, please?

この場合の 'good' はヒンディー語の *shubh* (= auspicious, happy) というヒンドゥー教に根ざした《縁起の良い、吉運の》という意味の語の英語訳であり、相手に対する敬意を表わす。

b. ヒンディー語の強調表現を英語に直訳したもの

We arrived today only. (今日着いたばかりです)

Now only I understood the problem. (今、やっと問題がわかりました)

この場合の *only* はヒンディー語の強調の *hi* の英語訳であり、ヒンディー語では名詞・形容詞・副詞・動詞等、強調したい語であればどんな語の後にもつけることができる。

c. 意味的に近い語を重ねることによる強調

extremely excellent

very very perfect

以上、＜インド英語＞の特徴を概観してきたが、全体としては＜イギリス英語＞を基礎にしなながらも、さまざまな点でインド独特の言語文化が盛り込まれているのが観測される。このような傾向は他の「外円」の英語にも当てはまる。

独自の文化的価値観を維持しながら英語を「現地種化」させてきたもう一つの好例である＜シンガポール英語＞に目を向けてみよう。

B シンガポール英語

小さな漁村にすぎなかったシンガポールがその地理的好条件を生かし、貿易港として栄えるようになったのはイギリスの東インド会社から派遣されたスタンフォード・ラッフルズが1819年に上陸して以来のことである。その後、シンガポールには中国人・マレー人・インド人・アラブ人等が次々と移り住むようになり、多民族・多言語社会としての様相を呈するようになった。第二次世界大戦時には日本に占領され「沼南島」と呼ばれていた時期もあったが、マレーシア連邦からの分離を経て1965年にイギリスから独立し共和国として誕生した。

独立後、シンガポールの三つの民族を代表する言語である中国語（中国人 76%）・マレー語（マレー人 15%）・タミール語（インド人 7%）⁽³⁾、そして英語の四つの言語が公用語として定められた。前述したインドでは、建て前としては今だに自国語であるヒンディー語がインド人相互の共通語・国語として制定され、英語はあくまでも暫定的言語、つまり「準」公用語としてとどまっているのに対し、シンガポールでは独立直後から積極的に植民地支配者の言語であった英語が公用語として選択されている。その背景にはシンガポールの指導者たちの素早い実利的判断、すなわち、国際社会で経済発展を遂げるためには英語が不可欠であるという考えが前提にある。また、亜大陸と呼ばれるほどの巨大な国土を持つインドに比べ、都市国家であり日本の淡路島ほどの大きさしかないシンガポールでは、日常生活に必要なあらゆる生活物資（飲み水に至るまで）を外国に依存せざるを得ないという事情も無視できないであろう。更には、多民族・多言語国家をまとめるため、また各民族集団間の融合をはかるためには、どの民族グループからも等距離で

中立的な言語である英語が必要であると政府が考えたからでもある。

シンガポールでは、英語を重視した「二言語教育」(Bilingual Education) が押し進められており、民族語であり公用語である中国語・マレー語・タミール語のいずれかに加えて、英語も学ばなければならない教育システムになっている。それぞれの民族言語を教育媒体言語としている初等・中等教育機関においても、現実には各民族の伝統・文化・宗教に関する科目以外は英語で教えるという学校が増えている等、英語への傾斜が目ざましい。また、高等教育レベルにおいては英語が唯一の媒体言語であること、英語が就職・昇進などに有利であること等のため、英語系学校のほうが学生数が増えており、このことからシンガポール人の英語への関心の高さが伺えよう。

この言語政策が効を奏し、シンガポールでは政治・司法・経済・教育といった公的場面だけでなく、職場において、また親しい友人や家族等との打ち解けたコミュニケーションの場面においても英語を使う人が増えてきた。彼らの使う英語は教育レベルの違いにより、〈標準イギリス英語〉に近いものからシンガポール国外ではほとんど通用しないであろうものまでさまざまである。

インドの場合と同様に、シンガポール人の間で国内コミュニケーションのために使われている英語は次第に「現地化」を経て、シンガポール特有の言語文化の反映されたものになっていった。〈シンガポール英語〉のある部分は〈シングリッシュ〉⁽⁴⁾と呼ばれ、一時は「教育のない人のことば」と見なされていたが、1980年代以降は、民族を超えたシンガポール人としてのアイデンティティーを示すものとして、肯定的に広く認識されるようになった⁽⁵⁾。

〈インド英語〉同様、〈話しことば〉にその特徴が最も顕著に現れている〈シンガポール英語〉を概観し、その音声的特徴、また語彙・文法・表現に見られる独自の用法について述べていきたい。

1. 音声的特徴

a. 母音

(1) 母音の長短の区別がなされない。

〈イギリス英語〉 〈シンガポール英語〉 (これ以降は記号 ⇔ を用いて、左側は〈イギリス英語〉、右側は〈シンガポール英語〉であることを示す。また括弧内のカタカナ表記は発音である。)

[i:]	⇔	[i]	feet と fit	} がそれぞれ同じ長さで発音される。
[u:]	⇔	[u]	pool と pull	
[ɔ:]	⇔	[ɔ]	caught と cot	

(2) 二重母音は単母音化される。

[ei]	⇔	[e]	make (メク)、take (テク)	} のように発音される。
[ou]	⇔	[o]	show (ショ)、home (ホム)	

b. 子音

[θ]	⇔	[t]	three は tree のように発音される。
[ð]	⇔	[d]	this や that は dis や dat のように発音される。

c. 二つの子音群では最後の子音が、三つの子音群では最後の二つの子音が発音されない。

ask ⇔ as(k) (アス)

just ⇔ jus(t) (ジャス)
 problem ⇔ p(r)oblem (ポブレム)

parents ⇔ paren(ts) (ペアレン)
 camps ⇔ cam(ps) (キャム)

d. 強勢

(1) 第一、第二の区別をせず、同等に扱われる。

àn-ni-vér-sa-ry ⇔ án-ní-vér-sá-rý
 cè-le-brá-tion ⇔ cé-lé-brá-tion

(2) また、＜イギリス英語＞とは異なった位置に強勢が置かれることもある。

chár-ac-ter ⇔ char-ác-ter
 ec-o-nóm-ic ⇔ ec-ó-nom-ic

2. 語彙

hawker centre: フード・センターのことで、ビルや屋外の飲食エリア。

makan: マレー語起源で《食べる》《食べ物》の意。[例] Let's go makan. (食べに行こう)

marketing: 'go to the market' の動名詞形であり、《買い物》の意。

[例] My mother does her marketing in the morning. (母は朝買い物に行く)

outstation: 《出張中》のこと。(注: ＜インド英語＞では out of station)

[例] He is outstation this weekend. (彼は今週出張でおりません)

shophouse: シンガポールの伝統的建物で、1階が店舗、2階が住居となっている。

stay: 'live' の意味で用いられ、'Where do you live?' は 'Where are you staying?' となる。

3. 文法

次の a から d の特徴は＜インド英語＞とほぼ共通している。

a. 冠詞: 冠詞は省略される。

May I apply for a car license? ⇔ May I apply for car license?
 You see the green house over there. ⇔ You see green house over there.

b. 複数形: 単数・複数の区別をつけない。

one of my lecturers ⇔ One of my lecturer

c. 付加疑問: 主節の主語、動詞に関係なく、is it? が使われる。

You are from Japan, aren't you? ⇔ You are from Japan, is it?
 He called, didn't he? ⇔ He called, is it?

d. 倒置: 疑問文や複文において主語と動詞の転換が起きない。

May I ask where the station is? ⇔ May I ask where is the station?
 When would you like to come? ⇔ When you would like to come?

e. 助動詞： can, cannot は動詞から独立して使われる。

A: You speak English, can or not?

B: Can または Can can.

Cannot または No can.

f. 時制： 現在形を過去形に使う。

He left my house last night. ⇔ He leave my house last night.

g. 動詞： 三人称単数現在形に -s をつけない。

She studies hard. ⇔ She study hard.

He says it all the time. ⇔ He say it all the time.

4. 表現法

a. 文末に lah をつける。

日本語の「ね」「よ」「さ」等の終助詞のようなもので、打ち解けた場面で多用される。

Relax, lah. (リラックスしなさいよ)

We go, lah. (我々も行くよ)

Sushi and sashimi are different, lah. (寿司と刺身は違うさ)

b. 反復による強調

I like to wear big big. (私、ダブダブの服が好きなの)

Everything is cheap cheap. (みんなすっごく安いだよ)

c. マレー語の表現を英語に直訳したもの

He is shaking legs. (彼は怠けてブラブラしてるよ)

以上、＜シンガポール英語＞の特徴を概観して明らかなことは、前述した＜インド英語＞同様、どちらの場合も＜イギリス英語＞の「核」にあたる部分を採用しながらも、「周辺」の部分でそれぞれの「個性」が組み込まれていることである。この二つの変種がそれぞれ特有の言語的・文化的環境の中で発達した独自のものであるにもかかわらず、多くの共通点が見て取れるのは非常に興味深く、また注目に値する。

4 国際英語と日本人の英語

今日、英語の話し手がネイティブ・スピーカー（母語話者）よりノンネイティブ・スピーカー（非母語話者）の方が多く、またノンネイティブ・スピーカーが英語に独自の機能と用法を生み出しているということは既に見た通りである。

英語が急速に世界中のいろいろな地域に普及すればする程、それぞれの風土的・文化的環境に順応し、英語に多少の地域差が生じてくるのは避け難いことであり、それは英語を母語とする国々においても、やがては＜イギリス英語＞＜アメリカ英語＞＜オーストラリア英語＞等と呼ばれる

ものに分岐したことから明らかである。ましてや旧植民地の地域それぞれの影響を受けた「現地種」英語において、その変容ぶりが一層際立っているのは当然と言えよう。

このような地域では英語は国内の共通語としてのみならず、他の国の人々とのコミュニケーションにおいても当然使われることになる。通信・航空・科学技術等の発展に伴うヒト・モノ・カネの流通が国境を越え、国際社会の構造が変化し始めた1960年代頃から、このようなさまざまな「現地種」英語が大きく浮上し注目されるようになってきた。従来の「英米語至上主義」的態度から「英語の多様性」を肯定的に捉え直そうという方向に転じ始めたのもこの頃からである。

さまざまな学術的研究が世界的レベルで活発になされるようになる中で、この運動は1978年に開催された二つの国際会議を機に更に大きな弾みがついた。一つはハワイの東西センター (East-West Center) のラリー・スミスが主催した会議であり、もう一つは前述したイリノイ大学のブライジ・カチュルーの主催したものである。両会議の提唱する主旨はその後、多くの有力な学者・専門家が賛同するところとなり、季刊誌である *World Englishes* を生み出すに至っている。

ラリー・スミス等の主張は大きく分けて次の三つに要約することができる。

- 1 英語は一つの言語ではあるが、同時に多くの異種を持っており、それぞれの地域の英語は同等の存在価値をもった優劣のないものである。
- 2 このような英語は今や母語話者だけの独占的所有物ではなく、使用するすべての人のものである。従って英語はアメリカやイギリスから切り離されるべきであり (脱国家化)、また英米文化にも縛られるべきではない (脱英米化)。
- 3 英語を母語とする人も英語の国際化の現実を認識し、従来の「英米語至上主義」的態度を改める必要がある。国際コミュニケーションの場で相互理解を図るためには、ネイティブ・スピーカーも多様性に富む「現地種」英語を積極的に認め、理解しようと努力しなければならない。

英語が (1) 母語話者同士、(2) 母語話者と非母語話者、(3) 非母語話者同士、の間で使用されているという現実を踏まえたところから EIL (English as an International Language 《国際語としての英語》) という言葉も新たに造り出された。今まで使われていた ESL 《第二言語としての英語》や EFL 《外国語としての英語》は英米人の立場から見た言葉であり、これだけではもはや現在の英語の状況を促えきれなくなったためである。

ラリー・スミス等の主張によって「英米人の英語のみが本物の英語であり、唯一の規範である」という従来の英語観は大きく修正を迫られることになった。その結果、英語はもはや英米人だけの特権的言語とはみなされず、むしろ「多国籍化」した多様性に富む「国際共通語」であるという見方が優勢になり、ネイティブ・スピーカーに対しても、ノンネイティブ・スピーカーの英語理解に等分の努力をするべきであるとの指摘がなされ、お互いに寛容な態度で歩み寄ることの大切さが提唱されたのである。

<国際語としての英語>の認識がこうして広がるのに伴って、日本においても1970年頃から<日本人の英語>を肯定的に促えようとする人達が現れてきた。さまざまな文脈の中で述べられたこのような人々の見解は次の通りである。

- (1) イングリッシュとエスペラントという二つの言葉をくっつけて「イングラント」と呼ぶ。一種の人工語であって、しかも、英語であるもの。ピジン・イングリッシュをさらに高度にすれば、私のいう「イングラント」になる。(小田 1970:64)
- (2) 現在多数の日本人が英語の必要性を感じ、これを説いているが、その人々が考えている「英語」とはイギリスの英語でも、アメリカの英語でもなく、実は世界語としての別の言語とも言うべき英語、「イングリック」なのだ。(鈴木 1971:4)
- (3) 外国人が英語を話しているのを聞いていれば、なまりでだいたいその民族、国籍等がわかる。日本人も当然日本人特有のなまりで話して結構だと思う。わかりやすい日本人なまりの英語を話した方がよい。(西山 1972:180)
- (4) コミュニケーションが正しく行われる限りにおいて、Japanese English があってもよいであろう。こういう確信が持てるようになった時にのみ、もっと我々日本人は、大きな声で堂々とした姿勢で世界の人達と話せるようになるであろう。(宇都宮 1977:162)
- (5) 世界には多くの人種が使う様々の英語が存在する。日本人が使う日本人の英語が生まれるのでなければ、永遠にモデルとしての英国英語や米国英語から自由になれないだろう。と言うことは、英国や米国からも自由にはなれないと言うことである。(中村 1980:380)
- (6) なまりから脱却することは不可能だといえますが、仮に脱却できたとすれば、それはすでに話し手が自己のアイデンティティーを失ってしまい、根無し草の英語使いになってしまったということです。(小川 1981:113)
- (7) 日本語の影響を色濃く持った英語——これを「ジャパリッシュ」と名づけた——を堂々と胸を張って使い、実際の「民際言語環境」の中で交流を生むことこそ、日本人が外国語を学ぶ本来の目的であるはずだ。(渡辺 1983:57)

以上、＜日本人の英語＞を擁護する代表的な人々の考え方を年代順に引用したが、ここに共通して流れている姿勢は前述したラリー・スミスやブラージ・カチュルーの主張と概ね一致しているといえよう。

この分野における中心的人物の一人である鈴木（上記(2)）は＜世界語＞としての英語に関して、更に次のように述べている。すなわち、英語にはイギリス人やアメリカ人等が＜母語／国語＞として使用する「民族英語」としての側面と、世界のさまざまな国の人が＜第二言語／公用語／外国語＞として使用する「国際英語」⁽⁶⁾としての側面が共存している。どちらもも同等の存在価値を持った優劣のない英語の変種であるが、この二つは分けて考えるべきである。前者は「英国固有の文化、文学、世界観と結びついた言語、その分派であるアメリカの言語」（鈴木 1971:4-5）であり、その所有権はアメリカ人・イギリス人にある。しかし、後者はそれを使用するすべての民族にとって等距離に位置する中立的なものであり、その所有権はそれを使用するすべての国民に分有されると説く。鈴木は更に、「国際化」した英語というものはアメリカ人やイギリス人等のネイティブ・スピーカーの英語がそっくりそのまま「国際英語」に昇格したものではない、つまり別のものだと指摘しているが、これはネイティブ・スピーカーの英語に規範を求める傾向の強い私達日本人には啓発的であり、特筆に値するであろう。

私達日本人の英語を学ぶ主要な目的は世界のさまざまな国の人とのコミュニケーションのためである。従って、ラリー・スミスや鈴木等の新しい言語観に立つならば、その時に道具として利用度の高い言語はこの「国際英語」なのであり、「民族英語」ではないということになる。もし英米人のみを交流の相手と考え、英米の文化や考え方を学ぶためだけに英語が必要なのであれば、英語は<国際語>と呼べる資格はないからである。ノンネイティブ・スピーカーである私達は国際コミュニケーションに関する限り「民族英語」を「習得することは不可能であり、その必要もなく」、更に日本人としての「アイデンティティーを維持するためにも習得すべきではない」(中山 1990:296) といってもよからう。

鈴木が喩えとしてあげているように、日本固有の武道であった「柔道」は国外で広く認められ国際スポーツとしての「ジュードー」になったことで、皮肉なことに日本人の手を離れ一人立ちし、日本人の独占的所有物ではなくなってしまった。同様に、英語は「国際化」したことで引換に、いわば「国際化」の代償として英米人の特権的占有物ではなくなったのである。すなわち、英語の所有者はそれを使用する全ての民族、いわば地球それ自体になったと言っても過言ではなからう。更に、「柔道」が「国際化」したことで柔道着の色が必ずしも白とは限らず、また体重別の級が設けられる等、中身が少しずつ変わってきたように、英語も「国際化」したことで多様化を余儀なくされた。しかし、「ジュードー」がやはり「柔道」としての要素を備えているように、英語の各変種間には英語としての共通項が多々見られるという事実は前述の<インド英語>や<シンガポール英語>で見た通りである。

国際コミュニケーションの場で現在英語に替わる国際共通語はなく、英語の有用性は疑う余地のないものとなった。外国とのかかわりやコミュニケーションの場において国際社会の一員として生きていくためには私達日本人も、好むと好まざるとにかかわらず、英語を使わざるを得ないだろう。そのために英米人を模倣する手段としてではなく、日本人・日本文化を意識し、自己のアイデンティティーを表現する道具として<日本人の英語>を作り上げていく必要があるだろう。英語の所有権は私達日本人にもあり、<日本人の英語>は「国際英語」の一変種と考えることも可能なのである。

注

- (1) 本稿は1999年7月8日、大阪女子短期大学に於いて「世界の英語・日本の英語」と題して、また2001年7月28日、東海女子短期大学公開講座では「世界の英語・日本人の英語」と題して講演したものの資料をもとに書き直したものである。
- (2) 現代中国語は、北方方言、呉方言、湘方言、韻方言、客家方言、閩方言、粵方言の7つの大方言群に分けられる(田中春美他『入門ことばの科学』p.131)。
- (3) タミール語はインド系シンガポール人の共通語として定められているが、実際にタミール語を母語として使っている人口はかなり少ない。
- (4) シンガポール英語は最も威信があり、<標準イギリス英語>に極めて近い上位語(acrolect)、中間に位置し親しい友人等との間で使われる中位語(mesolect)、そして最も威信が低く、シンガポール以外では理解されにくい下位語(basilect)に分類されており、<シングリッシュ>は下位語に規定されている(本名信行『アジアをつなぐ英語』p.38)。
- (5) 次の社説は一般大衆の中に広まりつつある<シングリッシュ>を支持するものとして国民の共感を呼んだ。

"Singlish is the spontaneous and delightful way that Singaporeans express themselves in English. In short, street talk. It is a language that is exclusively ours, lah... Singlish is the common dialect of the people of Singapore." (*The New Paper*, August 15, 1988)

(シングリッシュは当地で自然に発生した、気持ちを和ませる心地よいことばである。それはシンガポール人が自分を英語で表現する方法なのである。一言でいえば、それは街のことばである。それは、シンガポール人だけのことばである、シンガポール人の共通のことばなのである。) (本名信行『アジアをつなぐ英語』 p.38)

- (6) このような国際英語 (International English) > は専門家によりさまざまな名称で呼ばれている。ラリー・スミスの < 国際語としての英語 (English as an International Language = EIL) > の他に < 地球語 (Global Language) > ・ < 多国籍語 (Multinational Englishes) > ・ < 新英語 (New Englishes) > ・ < World Englishes (世界諸英語) > ・ < イングリック (国際補助語) > (Ⅱ. 4. (2). 参照) ・ < イングラント > (Ⅱ. 4. (1). 参照)、そして < ジャパリッシュ > (Ⅱ. 4. (7). 参照) 等々である。

参考文献

- 宇都宮秀和 (1977). 『日本人になる英語教育』 日本YMCA同盟出版部
 榎木園鉄也 (1997). 「スパイシーなカレーの英語」『英語教育』 Jan, Vol. 45, No. 12. 大修館書店
 小川芳男 (1981). 『話せるだけが英語じゃない』 サイマル出版会
 小田実 (1970). 「イングリッシュとイングラント」『私の外国語』 中央公論社
 織谷馨 (1983). 『英語史要説』 英宝堂
 クリスタル, D. 國弘正雄訳 (1999) 『地球語としての英語』 みすず書房
 鈴木孝夫 (1971). 「English から Englic へ」『英語教育』 1月、大修館書店
 —— (1985). 『武器としてのことば』 新潮選書
 田嶋宏子 (1997). 「No problem la!」『英語教育』 Jan. Vol. 45, No. 12. 大修館書店
 田中春美他 (1994). 『入門ことばの科学』 大修館書店
 中村敬 (1980). 『私説 英語教育論』 研究社
 中山行弘 (1990). 「ノンネイティブ・スピーカー・イングリッシュ、ニッポン人とアメリカ人の考え方」
 『アジアの英語』 くろしお出版
 西山千 (1972). 『誤解と理解』 サイマル出版会
 沼野治郎 (2000). 「インド英語の観察——タミル人の英語を中心に」『アジア英語と英語教育・第4集』 アジア地区大学英語教育研究会・研究報告、大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部
 本名信行 編 (1990). 『アジアの英語』 くろしお出版
 本名信行 (1993). 『文化を越えた伝え合い』 開成出版
 —— (1999). 『アジアをつなぐ英語』 アルク
 渡辺武達 (1983). 『ジャパリッシュのすすめ—日本人の国際英語』 朝日選書

- Enokizono, Tetsuya (2000). "English in India: Possibilities of Non-Native Englishes for Inter-Asian Communication." *Asian English Studies Monograph Series*. No. 1, December.
 Kachru, Braj (1983). *The Other Tongue*. Pergamon Press, Oxford.
 Parasher, S. V. (1998). "Language Policy in Multilingual Setting: the Indian Scenario." *Asian Englishes*, Vol. 1, No. 1.
 Smith, Larry E. (Ed.) (1983). *Readings in English as an International Language*. Pergamon Press. Oxford.
Asian English Studies Monograph Series No. 1, December, 2000. The Japanese Association for Asian Englishes.